

日本の公立図書館における児童エリアの変遷

林 充恵

公立図書館の施設・設備は、図書館サービスの基本的な考え方や各地域における運営方針に合わせて変化をしてきた。児童サービスは、人間形成において重要な時期にある利用者を対象としており、地域社会との関わりが強いサービスである。これらのことから、児童サービスは図書館サービスの基盤となるサービスと位置づけられ、施設面においては、発達段階の違いやサービスの多岐性から、提供するサービスに応じて環境を整える必要が特に強い領域である。「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」にも「児童室等の整備」について記述され、読書活動推進の面においても児童サービスを行うための施設・設備は重要視されているといえる。

本研究の目的は、日本の公立図書館の児童エリアの特徴を分析し、変遷を明らかにすることである。それにより、公立図書館の児童サービスと児童エリアの実務・研究の両領域において、その基盤を提供することができる。

本研究では、日本図書館協会建築賞を受賞した公立図書館 50 館の平面図等の資料を対象に、児童エリアの特徴を分析した。分析の視点は、(1)児童エリアの配置構成、(2)児童専門カウンター、(3)児童エリアの面積、(4)おはなし室の配置構成、(5)おはなし室の面積、(6)書架の配置、(7)書架数、(8)書架の配置と書架数との関係である。児童エリアの配置構成については、一般開架およびカウンターとの位置関係から分類を作成した。その結果から、児童エリアを独立させることによる防音と成長に伴う利用行動の変化等の観点から配置構成がされていることが明らかになった。児童専門カウンターは、利用者の行動と図書館側の管理の両面から設置位置が決められていると考えられ、設置の有無については図書館の延床面積および児童エリアの面積と関係があった。おはなし室の配置構成では、先行研究に基づき外付け型、内包型、分離型の3つに分類したが、空間が明確に区切られ児童が集中しやすい外付け型が最も多かった。児童エリア全体に対するおはなし室の面積の割合は、分離型が最も高かった。おはなし室の面積を広くし、児童エリアから離れた配置にすることで、おはなし会や読み聞かせ以外の目的で使用することも可能になると考えられる。書架の配置は、整列、斜、放射、組み合わせ、特殊の5つに分類できた。複数の類型を組み合わせている図書館もあり、整列以外の配置をすることで親しみやすい空間を作る図書館が増加していた。

児童エリアは図書館の中にありつつ、物理的かつ機能的に独立した面を持つエリアであり、日本の社会の変化や、図書館のサービス内容の変化に応じて配置構成や形態が変遷していることが明らかになった。

(指導教員 小泉公乃)